

「大至急ICUにビールを！」

川崎達也

誰が言ったのかは諸説あるようだが、「必要は発明の母」という言葉がある。それなら「自由は発明の父」と言っても差し支えないだろう。集中治療領域においても、自由な空気は柔軟なアイデアが生まれる土壌であると思う。

2008年頃私は豪州メルボルンのthe Alfred HospitalのICUで臨床研修を受けていた。同院はビクトリア州の重症外傷・熱傷センターであり、かつ心・肺移植センターでもあった。そのためICUには文字通り

quarternly ICUとして、三次施設でも手に負えないような重症度の患者が同州全域から転送されてきていた。同院のICUはTrauma/Cardiothoracic (CT) /Generalという3つのユニットから成り、CT/ICUでは常時数名の患者がECMOやVADによる管理を受けていた。

さて、心室性不整脈に対する早期低体温療法の導入で一世を風靡した¹先生が、CT/ICUのコンサルタント(指導医)を担当していた週のことである。ある日の夕方の回診時に、前日に冠動脈グラフト手術を受けて順調に経過し、午前中に抜管された初老の男性患者が、ベッドサイドのリクライニング椅子に深く腰掛けて過ごしていた。彼は世界的に有名なソウル歌手と同名の陽気な男性であったが(以下JB氏とする)、B先生はその歌手の曲を口ずさみながら声をかけた。

Dr. B:「おやじさん、調子いいみたいだねえ。そろそろ夜になるけど、寝られそうかい?今朝までぐっすり薬で眠っていたからね。」

JB氏:「先生、お陰様ですこぶる快調だよ。本当ならビールをクイツと一杯引っ掛けたいものだねえ。」

Dr. B:「おやじさん、一杯くらいでよく眠れそうかい?」

JB氏:「そりゃあ、そうとも。毎晩のお約束だからね。」

Dr. B:「わかった、一杯だけだよ。」

そう言うと、B先生は当時まだ手書きだった指示書に、

“Beer, ASAP!”

と大きく走り書きした。普段からジョークを連発しているB先生のことなので、私はまたてつきり悪い冗談だろうと決め込んでいた。(注)ASAP=as soon as possible「可及的速やかに」を意味する略語)しかし、である。

「マジか!?!」

回診を終えた私の目に飛び込んできたのは、ベッドサイドでビールのグラスを傾け至福のひと時を過ごすJB氏の姿であった。そのビールは小さなグラス一杯ではあったが、紛れもなく院内栄養部門から上がってきたものに他ならなかった。

翌朝の回診時、JB氏はB先生に朗らかに挨拶した。「やあ、先生、お陰様でよく眠れたよ!」と。その日JB氏は一般病棟に退室して行った。B先生曰く、「もちろんあいつた患者さんが眠れないときに睡眠導入薬を処方するのは定石だろうが、日々のルーチンを取り戻してあげるだけでよく眠れるなら最高じゃないか!ベンゾみたいな薬でせん妄を起こすよりはるかにいいだろ?」と。

その後も同院ICUでの研修中に、限定的ではあったが、晩酌しながらに酒類の提供が認められた患者に出会うことになった。その中には、呼吸ECMOが導入されながらも経過が思わしくなく、家族に救命困難という見込みが伝えられた中年の女性患者もいた。彼女の何よりの楽しみは、毎晩寝る前に少量のブランデーを嗜むことであった。

もちろんこの場において、病院で酒類を提供することは是非を論ずるのは無粋というものであろう。ましてや、わが国の病院やICUでも酒類を提供できるようにすべきと訴えたいわけでもない。それでも、心底羨ましく思えたことは、突飛なアイデアを受け入れて形にしてしまう自由な空気であった。



そして、その自由は、集中治療に対する確固たる矜持と覚悟に裏打ちされていることを痛感させられた。
ともするとガイドラインやマニュアル、コンプライアンスに雁字搦めにされかねない昨今ではあるが、50年後のわが国のICUに健全な「自由」が根付いていることを願わずにはいられない。